

二次元ドリームノベルズ/PDF立ち読み版



小説 水坂早希

挿絵 高浜太郎

序章	
第一章	アルカナの化身
第二章	召喚
第三章	干渉結界
第四章	フレイ
第五章	毒の罠
第六章	主人と下僕
第七章	真実
第八章	蟲責め
第九章	肛門枷
第十章	完成した性費

登場人物紹介

Characters



さいみや かへで

犀宮 楓

高名な魔術結社〈犀宮〉のただ一人の生き残り。一人娘で両親を亡くしているため、広い屋敷に一人で住んでいる。霧島魔術学園生徒の中でも、二を争う実力の魔術師。

フレイスター・シュタインヴェル・ソールズベリー

通称フレイ。楓といつも学園生徒内の実力一、二を争っている魔術師で、楓のライバル。楓にはいつも喧嘩腰だが、後輩の面倒見がいい。

きりしま たかふみ

霧島 貴文

霧島魔術学園の理事長であり、魔術結社〈霧島〉のマスター。楓の母の兄にあたる実の伯父。

さいじ せいじ

犀司 清二

霧島魔術学園の魔術主任。代々〈犀宮〉に仕えている〈犀司〉の末裔。

自分でも顔を背ける陰肉の捲れ様を暴かれ、楓は真っ赤になった美貌を振り乱した。

「ようやく肛門も顔を出したのう。なんと美しい桜色だ。とても排泄口だとは思えぬわい」
その指摘通り楓の肛門は、赤ん坊の唇のように柔らかそうな桃色をしていた。

羞恥で尻房から太腿まで火照り、菊皺がキュッとおちよぼ口になる。

「くううううっ、そんな恥ずかしいとこの色までえ……いちいち説明するなあっ」

「ククク。処女には、きつかったかのう。どれ、羞恥を紛らわしてやるわい」

新たに伸びた二本の舌が、絞り出された双乳に絡まり、またも苛烈な搾乳が始まる。

「ひゃぐん!？」と楓の陰肉がくるまって花卉が隠れ、深い縦皺が再び肛門まで抉れ走る。

「ほうれ、誰が陰唇を閉じてよいといった。性玩具らしく、奥まで捲り見せたままでいろ」

四本の細舌が鉗子のごとく陰唇へ食いこみ、ぐちりと陰肉で桜色の四角形を作らされた。

「ひゃあッ、そ、そんなとこ、そんな一杯広げるなあっ、あ、熱いいッ——ひぐんんッ!!」

内粘膜を毒液で直接焼かれて子宮が沸騰し、楓はまたも敵の前で達してしまった。

だが楓が絶頂に追い遣られようと、四本の細舌のまさぐりは止まらない。幼く閉じようとする陰肉を四角形に固定したまま、薔薇の蕾を剥くように桜色の小陰唇を暴いていく。

むちりと肉鞘を剥かれ、勃起しきった陰核がひやりと外気に触れた。赤白く腫れた丸肉の下に晒された尿道口が、羞恥と性感でヒクつく。さらにその下の膣口までまん丸と押し広げられ、綺麗な薄肉をドーナツ状に広げる薄桜色の処女膜まで露わにされてしまった。

脳裏を真っ白にされた楓は、やや白濁した絶頂蜜の涎を、丸見えになった処女膜の穴か

らどろどろと垂らしながら、開いた唇から舌と涎を垂らして荒い息をついていた。

「はあっ、はあ……あうつくう………え？ い、いやッ、まさか——」

楓の背筋が凍りついた。ひときわ長大な紅色の触手が、股を割って陰唇すれすれに控えていたのだ。痲りきった裸の陰核を、十メートルはある舌で一舐めにしようとしている。

「お主の小水を味わってみたくなった。女芯を舐められたくなくば、自ら放尿するがよい」
あまりの羞恥と屈辱で、楓の黒髪が戦慄いた。

「ふ、ふざけないでよ、このど変態っ。そんな恥ずかしいことするはず——あぐうッッ！」

返事を最後まで聞かず、毒液にまみれた舌が捲り広げられた陰唇にジューウッと密着した。陰核が跳ね上がり、膀胱が圧迫される。楓はたまらず、達しながら失禁してしまった。

股布のように張り付く幅広の舌から、透明な小水がブシュシュッと漏れだし、尿と蜜と毒液の湯気がもうもうと立ち上る。楓の白濁した脳裏が、すぐに羞恥で真っ赤になった。

耳まで朱に染めて尿口を締めようとするが、陰唇をアイロンがけするような、ミリ単位の舐め上げが始めると、もうお漏らしが止まらなくなった。痲痺した陰核が右に左に上下にと跳ね回るが、肉舌の焼き上げから逃げられない。痲った肉豆の隅々まで磨かれていく。

そんな陰核拷問に敏感すぎる楓が耐えられるはずもなく、絶頂から降りられなくなった。
「ふあっ、熱い、ひうん、あぐうっ、ひんっ？ ——もう、ひやらああッッ!!」

再び揉まれ始めた双乳を振り乱し、M字にされた脚をばたつかせ、真っ赤になった美貌を左右に振って、頭の両側に結んだ髪房を暴れされる。楓は半狂乱になって陰核拷問から

逃れようとするが、陰唇全体を舐め上げる舌をどうやっても剥がせない。絶頂の痙攣が尿道まで走り、小水がジュッジュッと切れ切れにしか出せなくなる。さらには密着した肉舌に、ブジュッブジュッと絶頂蜜を漏らす汚辱音が響くようになり、楓の羞恥が爆発した。

おむつに排泄しているような錯覚がして、楓はもう心から消え入りたくなつた。

「なんと美味な小水だ。絶頂の蜜と合わさった味は、まさに聖水と呼ぶに相応しいわい」
「そんなもの味わうなあっ……ひん……もう舐めないでよお……あぐッ……クリトリス焼けるう」

十分以上もかけて陰核舐めが終わると、楓は身も心もぐったりとなつてしまった。

動いているのは、荒い息と共に上下する双乳と、恥液の涎を垂らして喘ぐ陰肉だけだ。

鉗子のように引いていた四本の触手が外れたが、陰唇は無惨に押し広がったままだった。薄桜色の処女膜の穴から、ぶじゅぶじゅと排泄された絶頂蜜が、お尻と地面を野太い水柱で繋ぐ。ひとしきりひり出すと、陰肉が食虫花のようにくるまり出した。再び幼女より深く長い縦皺がキュキュッと肛門まで走り、蜜柱が綺麗に断ち切れる。

楓は最後に、陰肉全体が肛門と化したような淫猥な蠢きを披露してしまった。

拘束していた触手が全て外れて宙に投げ出され、楓は我に返つた。

危うく肉床に尻餅をつきそうになつたが、なんとか両足で着地できた。立ち上がるものの、毒粘液で股間を焼かれた影響で、黒いニーソックスに包まれた膝に力が入らない。あれだけ達したのに、子宮がとろけそうに熱く、乳首と陰核も弾けそうなほど疼いている。

のろのろと楓は、粘液まみれの双乳を黒いノースリーブセーターの中へ戻し、魔法で裏返った赤いミニスカートの前後を革手袋で押さえて、視姦され続けていた恥部を隠した。

「今さら隠すとは面妖な。もうお主の絶頂顔も失禁姿も、処女の証すらも見たのだぞ？」

楓の頬が再び、かあつと朱に染まる。羞恥でスカートの前後を握ると、ぐちゅると蜜音が鳴ってさらに真っ赤になる。陰核の脈打ちが布越しにもわかり、泣きそうになった。

「う、うるさいっ……はあはあ……黙れっ」

「ククク。お主の乳房も陰唇も一見幼いが、中身は素晴らしい熟れ具合だ。我々アルカナに嬲られるために、よくぞそこまで性贖の器を磨き上げたものよ」

「くうっ……勝手なことをお……」

〈悪魔〉の嘲りが、楓の胸に突き刺さった。普段なら気丈に言い返せるが、何度も絶頂させられた後では、本当にアルカナに嬲られるためだけに生きてきたような気がしてしまう。「お次は、その桜色をした初々しい肛門だ。腸の奥の奥まで、じっくり調べてやるわい」

楓のお尻が、ヒクンと跳ねた。

いくら綺麗な桃色をしていようと、排泄物を嘔き出す場所だ。先ほども肛門は責められなかったため、さすがの怪物も排泄口を舐めるのは嫌なのだと安堵していたのに。

楓は排泄するだけで、しばしば達してしまうほど、肛門も過敏に熟れ育っているのだ。そんな急所を毒液で焼かれて、舌で嬲られたらと考えると、無性に怖くなる。

楓は両手でスカートのお尻を押さえて、震える脚で後退った。スカートの前が捲れて濡

れ光る幼陰唇が露わになったが、キュウキュウと羞恥で食いこむ縦皺を隠す余裕すらない。

「こ、こんな恥ずかしい場所を嬲られるのだけは絶対嫌あつ——ひ!? ひやぐううッ」

いきなり楓の肛門が灼熱した。いつの間にか股下の肉床から、男根径の野太い舌が垂直に伸びており、桃色の菊皺をジュウツと突き上げていたのだ。跳ね逃げようとした楓の両脇から、二本の舌が進入了。隠していた美乳が、またも左右の肩口からくり出される。

双乳の揉み上げが再開され、胸肉だけで上体を引き戻されて、その場に留めさせられた。「もう胸揉むなあつ、そんなことされたら：お尻に入っちゃうう、放せえつ、お尻熱い」

肛門にギチュツと全体重がかかり、楓は赤いブーツを可愛らしく爪先立ちにして耐えた。

「犀宮楓専用の肉椅子だ。その敏感な胸を揉まれたくなくば、大人しく腰掛けるがよい」

「な!? なに考えてるのよ、この変態! こんな所にい……座れるわけないでしょうっ」

楓のもがく姿を鑑賞したいのか、手も足も拘束されていないのが、なおさら屈辱だった。逃げるたびに美乳を揉みくちやにされて引き戻され、菊門をこじられる。たまらず楓は、肛門を突き上げる舌を両手で握った。スカートの後ろまで裏返しになり、えくぼを作って締まる柔尻も露わになる。焼き印を押されているように毒液の湯気が立ち上る肛門は、ねじ込まれた舌先を食い千切らんばかりに、桃色の菊皺をキュウキュウと増やしていた。

皮肉にも肛門の引き締めのお陰で、進入を防いでいる悲惨な状況だ。

だが、すでに麻痺毒で脱力しているうえに、敏感な肛門を嬲られては耐えきれぬはずもない。呆気なく踵をついてしまい、楓は野太い舌をぐぷりと亀頭一つ分丸呑みさせられた。

「——あぐンンンッ、あ、熱い、熱い、ひつ、お尻の中舐めるなあつ、気持ち悪い」直腸内の舐め上げが始まると、楓の背筋が粟立った。

灼熱していた子宮が、おぞましきで冷え、括約筋が脱力してしまう。尻肉が屈服したように横へふんわりと広がり、肛門皺がピンと伸びて桃色の丸口と化した。

肢体も肛門も受け身になったまま戻らなくなり、楓は泣きそうになった。

「ククク。わしは触手全てに五感があるから。桜色の直腸壁も、可愛らしい蠕動音も、濃い雌匂も、腸液の甘い味も、快感による締め付けも、全てが丸見えになっておるぞ？」

いやらしい医者に直腸をねつとりと触診されている錯覚がして、楓はお尻を震わせた。

「ほう、これはこれは。器と〈恋人〉のアルカナとなった相互作用か。排泄物が水晶のごとく、透き通っておるではないか。しかも甘い雌匂しかせぬとは、さすがは性玩具よ」

一番隠しておきたかった羞恥源を暴かれ、楓は耳たぶからお尻まで真っ赤になった。

楓の便が変質したのは、化け物の推測通り、アルカナとなつてからである。

一週間前の昼休み。犀司と決裂した後で急に催し、職員用便所に駆けこんだときのこと。女子職員が皆無で来客しか使わないため、このトイレはいつも空いている。和式便器な

のが不便だが、排泄行為でもしばしば絶頂声を漏らす楓は、ここを利用するしかないのだ。最初の一噴きで異変に気づいた。いきなり、甘い雌匂がむわりと広がったからだ。

恥ずかしさで上向けていた顔を俯かせて、楓は愕然となった。息んだせいでぐちゃりと桜肉を広げている幼陰唇越しに、ガラスのように透明な固形物がぶら下がっていたのだ。

腸内で雑菌が完璧に浄化されたのだろう。悪臭など微塵もない代わりに、自慰をしている最中のような甘い香りが漂っている。まさに蜜を固形化したような便だった。

楓は一瞬で悟った。器と〈恋人〉のアルカナとなった相互作用で、とうとう肛門まで雄に都合のいい肉弁——固形蜜を絞り出す女性器と化してしまったのだ。

その汚辱感で性感のスイッチが勝手に入り、楓は肛門絶頂から降りられなくなった。

ビクビクと上下するお尻の振り幅がみるみる大きくなり、透明便が便器を外れていく。楓は真っ赤になって、腹痛と絶頂を堪えようとしたが、動揺のせいか魔術が使えず狼狽した。慌てていたため、鍵をかけたのを忘れたのだろう。締まりの悪い扉が、便に押されて開かれていく。個室が丸見えになった瞬間、大腸の奥から搾られるように猛烈な腹痛がきた。全力の息みと絶頂で痙攣した脚が突っ張り、扉の外へお尻を突き出した中腰になったまま硬直してしまう。個室の外まで汚してしまうようになり、楓は羞恥の沼底に叩き落とされた。

そのとき誰かが来たなら、楓は間違いなく『変態』の烙印を押されてしまっただろう。

学園一、二を争う美少女が、馬跳びの馬のように両手で足首を握って、裸のお尻を突き出しているのだ。しかも、処女膜すら覗くほど捲れ裏返った桜肉からは、透明な小水をシューシューと、まん丸と開いて盛り上がった桃色の肛門からは、寒天を流腸されたような透明便をぶしゅぶしゅと、個室の外へ噴き出している。そんな変態排泄を行いながらも絶頂に陥っているのか、高々と上げたお尻と便器が野太い蜜柱で粘り繋がっている。

結局、楓は午後の授業が終わるまでずっと腹痛と絶頂が収まらず、噴き出し口を突き出

した羞恥姿勢のまま扉を締めることすらできず、個室の内も外も蜜まみれにしてしまった。事後もあまりのショックで魔術が使えず、掃除道具でトイレを綺麗にしたのだ。床へ撒き散らされた大量の固形蜜をホースの水で流しているときは、死にたいほど恥ずかしかった。それ以来楓は、透明便をひり出す現実を忘れたいがため、ずっと便秘になっているのだ。楓の恥ずかしい回想が、突然打ち切られた。直腸内で触手の先がぶくりと膨らみ、四つに花開いたのだ。中心から雌しべのように細舌が伸び、触手先が蕾状の口と化す。その肉蕾が直腸に溜まった透明便を、ぐちゆるぐちゆると食べ始め、楓の尾骨が凍りついた。

「おお、なんと美味な便だ。まさに我々アルカナ全てを魅了する、ご馳走だわい」
いくら浄化されているとはいえ、腸に詰まった排泄物を直接食べられるとは思わなかった。予想を遙かに超える変態振りに、楓の真っ赤になった脳裏がぐるぐると回る。

「わ、わ、わ、私のこんな汚いものなんてえ……ひい……食べるなああッ！」

異物感と背徳感で直腸が縮こまり、触手を餌付けするように、ご馳走を後から後から搾り出してしまふ。肛膚を止めようと両手袋で肉管を締め上げると、苦しむ蛇のごとく触手がのたくり回った。固形蜜を貪られ、直腸壁の隅々まで伸ばされて蜜カスを舐め取られる。

極限のおぞましさで膝が折れて尻が沈み、グチッとS字結腸まで突き上げられた。

「ひゃんっ」と腸奥で達しながらも、楓は灼熱した子宮を鎮めようと歯を食いしばった。

この肛門性感に吞まれたら終わりだ。一週間前のトイレと同じ痴態を見せてしまふ。

なんとか耐えきったが、もはや薄氷の上だ。幼陰唇に抉れ走る縦皺の痙攣がキュウキュウ

ウと止まらなくなっている。だが、これ以上挿入されることはないと言わすを慰める。が、
「S字結腸口が肛門のように閉じておるわい。ほうれ、まだ終わりではないぞ。肉を開け」
結腸口に埋まった肉蕾が毒粘液を、ジュウウウウツツと高圧浣腸した。

「ひやああああ——ツツ、熱っ、熱いいい、ひんっ、お腹焼けるうう——っ」

熱湯を浣腸されたように腸奥が燃え上がり、楓は渾身の力で息んでしまった。終点だと思っていた肉弁が開いて入り口となり、肉蕾がずるとS字結腸まで入っていく。

理性の氷が割れ、楓は肛門絶頂の濁流に吞まれてしまった。こうなるともう、大腸を搾り尽くすまで絶頂が止まらないのは、楓自身が一番よく知っている。だが今は排泄とは逆に、野太い肉で腸を膨らまされているのだ。どうやって絶頂から降りろというのだろうか。

楓は両脚の痙攣すら利用して逃げようと暴れるが、お尻を浮かすたびに美乳を揉みくちやにされて肉椅子に引き戻され、桃色の丸肛門に全体重をかけさせられる。

「ククク。どうやら便秘だったようだのう。透明な便がたっぷり詰まって、S字結腸がソーセイジのごとく膨らんでおるわい。わしを持って成すために、溜めこんでおったのか？」

こんな変態に食べさせるために、トイレを我慢していたのかと思うと、楓は恥辱で狂いそうになった。土壌を進むミミズのように便を食りながら、肉蕾が奥へ奥へと潜ってくる。結腸のS字がグリグリと垂直に矯正されていくのがはつきりわかり、乳首まで震えが走る。

「もう…食べるなあ…あぐッ、もう私の食べるなあっ——ひん!? そ、そこは、いやあッ」
S字結腸の最奥にある窄まりを突かれると、楓の脳裏がさらに白く滲んだ。

「大腸へ至る腸の閉塞部だ。ここを押し広げられると、たまらぬだろう？」

息むスイッチを押されているよう。閉塞部をこじられるたびに、子宮に白い火花が散り、桃色の丸肛門がさらに捲れ裏返つて、接合部から透明な腸液がプシュプシュと噴く。

「それ以上は、ひぐ、絶対無理い、ひう、もう奥突くなあ、ひん、頭おかしくなるう」

大腸まで進入されると、楓は一際深く達し、幼陰唇から縦に潰れた蜜を嘔いてしまった。「ククク。ようやく大腸まで入ったわい。さあて、ここからはすんなりと飲みこめろぞ」

もはや触手を拒む肉弁はなにもない。串刺しにされたお尻が、呆気なくずると沈み始め、楓は総毛立った。広い大腸に入ると、肉蕾がさらに我が物顔で暴れ出す。

「おおう、甘い大腸液でどろどろになった便の、なんと美味なことよ」

溜まった透明便を貪られ、腸壁を粘液浣腸で洗い焼かれ、腸ひだの隅々まで舐め抉られる。経験したことがないほどの排泄欲に襲われ、ギョルギョルと腹が鳴る。それなのに痛みがまるでなく、子宮を雑巾搾りされるような快感しかないのが、純粹に怖かった。

中腰になった肢体がさらに沈み、便の代わりに野太い触手を詰められて、ほっそりとした腹が妊婦のごとく膨らんでいく。膝を突いて堪えようとしたが許されず、和式便器に座るような羞恥姿勢にされてしまう。下行結腸を全て肉詰めにされて、ようやくお尻が止まった。拷問が終わったかと思えば、肉蕾が曲がつて横行結腸にまで進入を始める。汗と蜜と腸液にまみれたお尻が無情にも再び沈みだし、楓の潤んだ紫の腫が震えた。

「もうやめてえええ——っ！……ひいいうう……ど、どこまで入れるのよおっ」

「お主専用の肉椅子だといったらう。当然、その可愛らしい尻が床につくまでだ」

「そ、そんなの無理よおつ、もう入らない…もうほんとに入らないのおつ…お腹破れるう」
「これほど素晴らしい大腸が、そう容易く破れるものか。浣腸を三リットルは飲みこめそうに柔軟なうえに、飲みきれぬほど腸液を分泌させてよがっておるではないか」

もはや床まで三十センチ。和式便器にしゃがむような羞恥姿で、楓は両手袋を前後について苦悶していた。便秘で苦しむ妊婦が野太い固形物をひり出す姿を、逆再生しているような淫猥な光景。息むごとに幼陰唇が別生物のように裏返って桜肉を晒し、小水と蜜がジャジャッと噴く。桃色の丸肛門が何段にも捲れ、野太い触手が一ミリずつ埋まっていく。「ひぐつ、あぐッ、ひうン…やらあ…もうやらああッ——ひ!? 熱いいい——ツツ!!」
とうとう肉床に尻餅をついてしまい、柔らかな尻肉がジュウツと毒粘液で焼かれる。触手詰めにされた大腸全体が縮まり、楓は深く深く達しながらゆつくりと気絶していった。

気がつくと楓は、肉床へ仰向けに寝かされ、細い脚をM字に押し開かれていた。

触手を腸詰めにされたままなのだろう。白い腹が黒い上着をまくって、カエルのようにぼつこりと膨らみ、可愛らしいヘソが飛び出そうに震えている。

分娩台に乗せられた妊婦そのままの羞恥姿に身も心も真っ赤になるが、大腸からたっぷり吸収させられた麻痺毒と媚薬が回って、もはや脚を閉じるどころか指先すら動かせない。絶頂間際で何時間も焦らし責めを受けたよう。身体も心も焼け溶けそうに熱く、膣と子



宮と直腸とS字結腸と大腸を裏返して掻きむしりたくなるほど、お腹全体が疼いている。

発狂寸前の欲情で朦朧となった楓の視界に、鈴状の先端を持つ不気味な触手が映った。

肉管に押し開かれた丸肛門の上、痙攣する幼陰唇に、ジュッと押し当てられたのは、

——どう見ても男性器だった。戦慄と共に、楓の意識が一気に覚醒する。

「主人に処女だけは傷つけるなど厳命されておったが、もう堪えきれんわい」

「ち、ちよつと、あなた正気？ こんな開けた場所で、私の「器」を大成させるつもり？」

無茶苦茶だ。なんの策も用意せず楓の処女を奪うなど、誰にとつても自殺行為だ。

「私が性贖として完成したら、他のアルカナも一斉に集まってくるわよ？ そうなれば、

この結界だつて破られる。私の取り合いになれば、あなたもただじゃ済まないわよ？」

「危険は百も承知だ。だが、もはや止まらぬわい。お主のいやらしい女体を呪うがよい」

化け物の龟头が、陰唇の縦皺をグリリと押し開いていく。楓にとっては、胸にナイフの切っ先がめりこんだのと同義だ。

幼い頃に凄絶な拷問を受けた楓は、他人に助けを求める無意味さを、嫌というほど知っている。あのとときも、どれだけ泣き叫ぼうとも、ついに最後まで助けがこなかったのだ。

頼れるのは自分だけ。龟头が膣内を押し進む。自らの力が尽きれば、それで終わり。処

女膜がピンと張りつめる。誰かに助けを求めるなど、愚の骨頂。——だが、

「アル……ミニ」

気がつくくと、楓は呟いていた。その名を口にすると、もう止まらなかつた。こんなとこ

ろで終わりたくない。十年前に届かなかった願いすら籠めて、声を限りに叫んでいた。

「——アルミニ、助けてよお!!」

計ったように、破壊音が轟いた。空を覆っていた黒い結界がひび割れ、砕け、夜に溶けていく。差しこむ月光をギリリと弾いて神速で飛来したのは、青雷を纏わせた白銀の鎖だった。鎖が触手塊の中心——命の核を正確に貫き、化け物の巨体を吹き飛ばしていく。

楓の胸奥が、どうしようもなく熱くなる。幼い頃の自分すら救われた気がした。

それでも照れ隠しに、「遅すぎる」と怒鳴ろうとアルミニを見て——その姿に絶句した。

「遅れてすまない楓。少々難解な結界だったからな。構成術式の解析に時間がかかった」

「馬鹿なッ、こんな短時間に、我が大魔術を解析しただと？ それに、たとえ結界の構成術式がわかろうと、こうも容易く破れるはずがッ」

「容易くは、なかつたさ。霊馬と我が身の半分を触媒にして、ようやく破れたのだからな」
左手に握った鎖を引き絞り、アルミニがゆっくりと歩み寄ってくる。その右半身——右肩から右脇腹までが、ごっそりと欠損していた。赤白く切断面が膨らみ、骨肉が伸び、瞬く間に右腕の再生が終わる。だが、あれほど力強かったアルミニの気配が、瀕死かと思えるほど衰弱しているのがわかり、楓は泣きそうになってしまった。

“起爆”の術を刻まれた鎖が、化け物の核へと吸いこまれていく。アルミニの放った黒いマントが楓の裸体を隠すのと、《悪魔》が散り散りになって絶命するのは同時だった。

断末魔がやんで夜の静寂が戻ると、急に場違いな気恥ずかしさが膨らんだ。

第九章 肛門枷

赤い絨毯に覆われた石床の上で、フレイは猫のように丸まって、うとうととしていた。

「お主をもっと馴らしてやりたいところだが、急用ができた。強力なアルカナを従えた魔術師が、急速に接近してきているのだ。お主に匹敵するほど美味しそうな女魔術師がな」

白霧が立ちこめたフレイの脳裏に仄かな色が灯り、ゆっくりと思考が動き出す。

強力なアルカナを従えた女魔術師。……楓のことだ。楓は今朝、理事長の真意を確かめると告げて、遙か北の地へ旅立って行った。その楓が異変を察知して戻って来たのだ！

フレイの意識と理性と誇りが急速に回復していく。死にたくなるほどの羞恥と屈辱が胸を焦がしたが、その激情すらも助けにして、虚脱した上体を引き起こす。

と、いきなり排泄管ごと桃尻を引かれて「ひゃぐん!？」と金髪を跳ねさせてしまった。

四つんばいになったまま細肩越しに後ろを見ると、生々しい陰莖色をした数珠状の触手が玉座からピンと伸びており、腸液まみれのむっちりとした桃尻の谷間に消えていた。

法王の亀頭大から指先大まで、大小様々な肉玉が連なり、褐色弁を押し開いて直腸を膨らませ、結腸のS字を上って大腸まで潜りこんでいる。肉玉の一つ一つがまさに亀頭のごとく不気味に蠢動しており、電動のアナルビーズなど問題にならないおぞましきだ。

奮い立った心が一瞬で凍りつき、腰に残った純白のドレスが怖気と排泄性感で戦慄いた。

「な、なんですのこれはあつ……ひいいッ、お腹の奥まで入ってえ……脈を打つてますわあ」

「我が留守の間、逃げ出さぬよう繋いでおいたのだ。お主の大好きな肛門枷でな！」

首輪より酷い肛門枷でまたも縛られてしまったのだ。屈辱と羞恥で泣き喚きそうになる。

「我は女魔術師を迎え撃つ。空間に穴を開けておいたから、逃げられる物なら逃げてみる」

男の指差す先を見ると、遙か五十メートル先に法王の間の出口らしき光が見えた。

「もつとも、その肛門枷は特別製だ。大腸から抜けるたびに射精して瞬時に肉玉が分裂し、延々と抜けることがない。枷を外すには、この部屋から脱出するしかないぞ。まあお主の淫乱な肛門では、脱出はおろか十歩と進めず排泄絶頂の虜になつて足が止まるだろうがな」

肛門枷の淫猥すぎる性質を知らされ、肉玉を頬張る褐色弁がおぞましさとでキュウキュウと締まる。法王が哄笑しながら立ち去つた後も、フレイは慄然としたまま硬直していた。

……楓を迎え撃つといつていた。楓たちの桁外れな強さも感知しているはずなのに。つまり、それでも勝算があるほど、下劣で極悪な策を用意して待ち構えるつもりなのだ。

もし楓が敗北して捕まったなら、性贗の器たる彼女は、フレイよりさらに過酷で淫ら極まりない目に遭わされるだろう。あの愛らしい捻くれ娘の泣き顔が浮かぶと、またも心に熱い火が灯った。——そんなことは、もう二度とさせるものか！

白い素足を戦慄かせ、フレイは立ち上がった。膝が生まれたての子鹿のごとく揺れたが、四つんばいで進んでいては苦痛が長引くだけだ。菌を食い縛り、まずは一步踏み出す。

茶色の数珠肉がピンと伸び、反射的にお尻を押さえようとしたが、魔術が効いたままの

ように、腰から下へ両手を下ろせない。お臍を押さえ、震える太腿に力を入れる。

褐色菊が内部から押し開かれ、龟头以上もある肉玉が顔を出す。直腸が擦られ、S字結腸が太いゴムのごとく真っ直ぐに伸ばされていく。排泄性感による怖気で菌が震える。

と、褐色菊とS字結腸口と大腸の終点の三肉弁で同時に、ぶちゆりと一玉分、触手が引き出された。「ひあうう!？」と豊乳がぶるんと跳ね、膝がカクンと折れる。フレイは脳裏を真っ白にされながらも、極端な内股になって踏ん張った。だが、その頑張りを嘲笑うように、大腸で玉が分裂して異物感が増し、どぷりと熱臭い精液を放たれてしまう。

射精の量が少ないだけにかえってリアルで、雄の子種を腸内に注がれた汚辱感で腹の底まで凍りつく。一玉で、これほどおぞましい性感に襲われるのだ。出口まで歩くなど不可能に思えてくる。それでもフレイは、震える脚と戦慄く肛門を叱咤して歩みを進めた。

腰に残るドレスの可愛らしいフリルに飾られた豊尻が、ゆつくりと前後させる太腿に引かれて左右にむちむちと躍り、腸液まみれのきめ細かい尻肌がなまめかしくぬめり光る。

その桃尻から、むりゆむりゆと引き出される数珠玉は大きさがまちまちなため、褐色皺を指径ほどに捲られたと思えば、触手の継ぎ目でキュッと閉じさせられ、次の玉では菊皺が桜色に変じるほどぐちゃりと丸肛門を晒されたりと、菊弁を一時も慣れさせてくれない。「んあぁ…あうんッ…くうう…ひゃん!? ひううっ…くひんんッ…はあ、はあッ」

どぶゆるどぶゆると大腸に射精されるたびにどす黒い官能が増し、とうとうフレイは排泄器官特有の連続絶頂に陥ってしまった。脚がガクガクと揺れたが、しゃがんでしまった

ら、もう立てなくなるのはわかっていた。怖気と絶頂波で豊乳をぶるぶると揺れ乱して、薄桃色の乳首まで痙攣させながら、涎まみれの唇を引き結んで大腿で歩を進めていく。極端な内股になっているため、歩くたびに内腿と桜色の陰唇が擦れて、くちゆくちゆと蜜鳴りがする。排泄器官の三つの肉弁を同時に嬲られる性感で腸管全体が熱くとろけ、大腸に残っていた大量の空気まで、ぶじゅぶじゅと噴き出すようになる。

ぬらつく桃尻から太腿までかあつと朱に染まり、恥ずかしさと虚脱で足元の床が柔らかくなっていく。それでも夢遊病者のごとく足を進めたが、二十歩目でとうとう膝が崩れた。勢いよく四つんばいに倒れこんでしまい、肉玉が一気に一メートル分もぶぢゅぢゅぢゅと引き抜かれる。「あひいいいいッ」と凄惨なまでに深い排泄絶頂に墮とされる。

フレイは羞恥の土下座をするように、美貌を床に伏せて桃尻を高々と上げてしまった。

頂点に晒された肛門は噴火口のごとく捲れ裏返った姿で、桜色の肉をぶりゅぶりゅと躍らせ、寒天のごとく濃い透明腸液と空気を下品に散り撒いている。陰唇と唇からは歡喜の涎が、全身からは甘い脂汗がどろどろと垂れ流しになり、フレイの雌匂がむわりと広がる。

もう無理だった。これ以上、一センチも進めない。それどころか、このままじつとしていても、排泄絶頂から抜け出せずに気絶しそうなほど、腸管が熟れとろけてしまっている。

白い官能の濁流に吞まれるがまま、意識を手放そうとして——フレイの心が拒否した。

楓を……助けないと。戦力にはなれなくても、助言くらいはできる。

「あううっ」と甘叫びしながらも、四つんばいで前へ進み出す。一玉吐き出しただけで絶

頂が深まり、桃尻がぶるぶると震えたが、もう歩みを止めなかった。膨らんだ丸肛門からぶじゅぶじゅという破裂音が鳴り止まなくなり、緑の瞳から羞恥の涙がぼたぼたと落ちる。あの可哀想な捻くれ娘を、こんな恥ずかしくて屈辱的な目になど、絶対遭わせるものか。フレイは肢体中を汗と涎と蜜と腸液でぬらつかせ、なめくじのごとくなまめかしく這いずっていく。腸管越しにゴリゴリと子宮が擦られ、ポルチオ性感帯でも連続絶頂が始まる。三十メートルも過ぎると、床へ引かれて揺れ躍る豊乳でも官能が暴走した。

「胸、胸でもイッてえ……あひうっ……あうんっ——くやあ>NN>NN」

もはや肉体のあらゆる部分で絶頂の紫電が散り狂っている。一玉ごとに大腸へ注がれる熱臭い精液はもう何百人分にもなり、今日三度目となった凄惨な妊婦姿にされている。

絶頂すら陵駕する腹痛に襲われ、渾身の力で息みっ放しになるが、大腸の出口で肉栓をされているため、肉火口姿のまま躍る丸肛門からは、透明な便かと思うほど濃い腸液が、ぐびゅぐびゅと散り撒かれるだけだ。桜色の陰唇もとうに開きっ放しで、絶頂の蜜柱を絨毯まで垂らし、蟲で拡張された尿口からは野太い潮を真後ろへジュッジュッと噴いている。そんな淫惨すぎる状態に追い遣られながらも、フレイは淫獄に墮とされた亡者のごとく這いずり続ける。だが虐めに虐めた肢体がとうとう限界に達し、完全に虚脱してしまった。とろけた美貌を仰向かせると、壁に空いた出口まで残り十メートルだった。

しかし今のフレイには絶望的な距離だ。と、なんと数珠状触手の巻き取りがゆつくりと始まり、驚愕で丸肛門がキュキュッと褐色菊に戻った。ぺたんと女の子座りになった状態

で、肛門ごと桃尻がずるずると引きずり戻され、結腸管から魂まで戦慄が駆け抜ける。

「そ、そんなあつゝひぐッゝこ、こんなの酷すぎますわあつ——ひ、ひやらあああッ」

フレイは狂乱の極致に達した。身に荒れ狂う性感を吐き出すがごとく、滅茶苦茶にもがいて出口へ急ぐ。絶頂の痙攣すら利用して四肢を突っ張らせ、馬跳びの馬になったような羞恥姿で豊尻を突き出し、肉玉と腸液と蜜と潮を全力でひり出しながら猛然と進む。

腸管も子宮も脳裏も極限までどろどろにされながらも、なんとか出口を潜り抜けた。

気持ち悪い肉玉がようやく抜け落ち、心から安堵する。だが、ここはどこだろう。周囲が奇妙なほど静まりかえっている。視界の霧が晴れると、——フレイは愕然となった。

四つんばいになって脱力するフレイの周りに、何十人もの生徒が取り巻いていたからだ。なんと野次馬でゴった返す全壊した教室のただ中に、半裸で放り出されたのだ。

ぬめり光る豊乳と桃尻をひやりと外気で撫でられ、フレイの理性が残酷に戻ってくる。嵐のような恥ずかしさが燃え上がり、美貌から桃尻まで白肌全てがボッと火を噴く。

戦いを挑んだフレイがアルカナと消えて数時間。夕方になって忽然と現れた彼女は、豊乳も桃尻も剥き出しにされ、ぬらつく全身から生々しい雌匂の湯気を立ち上らせて、ぼろぼろに衰弱していた。敗北して今の今まで敵に犯されていたのは、誰の目にも明らかだ。

学園の人気一、二を争う麗しいお嬢様が、普段の可愛らしい高飛車ぶりからは想像もつかないほど、淫らで惨めな姿で脱力しているのだ。取り巻いた生徒たちは皆、愕然となった。声もなく立ち竦んでいる。その静寂を破ったのは、フレイの腹から響いた雷音だった。



フレイは大腸に千人分以上もの常識外れな連続射精を受けて、臨月の妊婦のごとくお腹を膨らまされているのだ。腹痛が荒れ狂い、精液がS字結腸から直腸へと雪崩れ落ちてくる。大量の百足を流腸され、長々と排泄させられ、五十メートルもの数珠状触手を引き抜かれるという淫惨極まりない拷問を受けた肛門が、耐えきれぬはずもない。

排泄衝動に操られ、生徒たちへ桃尻を向けた羞恥の土下座をしてみよう。美貌と豊乳が床へつき、金糸細工のような髪が扇状に広がる。白い孕み腹とぬらつく桃尻が持ち上がり、むっちりとした尻房が左右へ柔らかそうに割れ膨らむ。尻の谷間がなくなるほど桜色の陰唇が迫り出し、褐色菊全体がさらにぶくんと膨れる。たまらず捲れ裏返った菊皺の褐色が一瞬で桜色に変じ、ピンと伸びきった丸肛門から精液が、ブジュジュ——と迸った。フレイの存在全てが、羞恥の沼底へ叩き落とされる。

「いやあああああ——ッ！ 見ないでください、見ないでくださいなあああッ!!」
真後ろへ噴き上がった白濁液を避けるように、生徒の波が割れた。野太い精液柱となった迸りが三メートル先の壊れた壁まで飛び、精臭のする湯気がもうもうと上がる。

生徒たちが騒然となり、周囲で悲鳴とざわめきが爆発した。

「フレイ先輩っ」「嫌あ」「ひ、酷い」「これ、やっぱり昼に襲って来たアルカナに？」

いつも慕われている女生徒たちに愕然とした顔を向けられ、灼熱した子宮が恥ずかしさで揺さ振られる。またも排泄絶頂に陥ったまま降りられなくなり、桃尻が淫猥に揺れ乱れる。ジュウジュウと間欠泉のごとく噴く精液が上下左右に散り撒かれ、どよめきが広がる。

「フレイさん負けたのか」「この臭いって精液だよな」「後ろでされてるな。可哀想に」

男子生徒たちの憐憫の眼差しが降ってきて、誇りまでも朱に染まる。暴れる丸肛門の下で桜色の陰唇が開きつ放しになり、どろどろと垂れた絶頂の白蜜が陰核と床を粘り繋ぐ。恥ずかしすぎる激情に耐えきれず金髪を振り乱すと、柄の悪い男子らの嘔きが届いた。

「フレイ先輩、巨乳なのに胸綺麗だぞ」「うわ、全部丸見え。おい、後ろ回って見てみるよ。フレイさん、ま×こもすげえ綺麗だぞ」「ほんとだ、真っピンク」「尻の穴ってあんな広がるんだ。痛そお」「うわ、まだ嘔いてる。何人に犯されれば、こんな精液溜まるんだ？」

下卑た視線と野次が、丸肛門の奥に晒された直腸にまで、浣腸液のごとく染み入る。被虐性感と排泄絶頂が腸管全体で弾け、排泄音がさらに恥ずかしくブジュジュツと高鳴る。

「なに酷いこといってんのよ男子！」「は、早く、保健室に連れて行ってあげないと」

もはやそんな優しい言葉すらも、フレイの心を追い詰めるだけだった。

曲がりくねった大腸全体に、限界以上まで精液を充填されたのだ。簡単に排泄が終わるはずもなく、搾りきったと思えば「んあッ」と全力で息んでしまい、断続的に大量射精をしてしまう。ついには大量の空気まで混ざり出し、もはや肉火口となって躍る桜色の丸肛門から、霧状の精液が溶岩のごとくグジュジュツと噴き上がり、透明な固形腸液が噴石のごとく、ぐびぐびぐびと下品に散り撒かれる。

トイレですら演じたことのない下品極まりない排泄を、見知った生徒たちにお尻を向けて、ぶりゆぶりゆと晒しているのだ。心が先に死んでしまいそうな極限の羞恥だった。

だがなおもグジュリと腐肉を進められると、未体験の肛門性感で直腸が燃え上がった。

もう楓の排泄管は、蜜壺と同じく陰茎に悶え媚びるだけの淫らな性穴となっているのだ。指や触手とは別次元のどす黒い快感で、鳥肌立った尻肉がふんわりと膨らんで屈服して、腐肉を根本まで受け入れてしまう。と、直腸の中で陰茎が一気に膨らみ勃ち、ぐちりと巨根と化した。腸袋を肉便で膨らまされて菊皺をピンと伸ばされると、膣口と蜜壺がキュウツと窄まって、茸状陰茎の存在感が暴発する。楓は法王の胸元にしがみついて悶えた。

「う、嘘お：二本も入ってるう：あぐツ!? 抜いてっ、抜いてえッ、お腹溶けるううッ」

8の字に押し広げられた桃色の肉弁が交互に縮まり、接合部から蜜と腸液がブジュッブジュッと噴く。二人の肉の逞しさを代わる代わる擦り込まれ、脳裏がどろどろになる。

「さて。次は性玩具らしく、自ら腰を動かして二人に奉仕してもらいましょうか。お前たちは動く必要はないぞ。思う存分腰を振って乱れられるよう、お嬢様の膝を立ててやれ」
「だ、誰が自分で動くかつ。え!? や、やああつ、そんな恥ずかしい格好させるなあッ」

黒いニーソックスで締まった膝を持ち上げられて両脚をM字に広げられ、法王の腰に跨がったまま、赤いブーツの爪先を立てて和式便器に座るような羞恥姿にされてしまう。

陰茎を食い締める膣口が丸見えになって頭が沸騰するが、腐肉を詰められた丸肛門にグリりと全体重がかかると、太腿の芯まで官能が走って脚が閉じられなくなる。

自分で腰を動かすなど、とんでもない。楓は両手を後ろについで、背筋を行儀良くピンと垂直に伸ばして恥部を晒したまま、立てた爪先と美乳を戦慄かせて硬直してしまった。

「おやおや、感じすぎて動けませんか。では性玩具の機能を一つ作動させましようか」

犀司が楓の腰に触れると、下腹を一周して書き連ねられた呪術文が、仄かに光って浮かび上がった。腰が意思に反して前後へゆつくりと動き始め、白く潤んだ脳裏が混乱する。

「ひゃん!? な、なに? 腰が勝手に動いてえ、な、なんの魔術をかけたのよ犀司い」

「男の精液を貰うまで痴女のごとく腰を振り続ける『卑猥女の腰』を作動させただけです。お嬢様の肌には、性贄を作るための呪術文の他に、こうした淫らな仕掛けを百個も刻んであるのですよ。簡単な魔術暗号で発動しますから、生徒たちにすら動かせるでしょうな」

性贄にされただけでなく、いつの間にか我が身に、あらゆる淫らな仕掛けを施されていたのだ。これでは、まさに性玩具ではないか。楓はあまりの汚辱感で絶句してしまった。

腰が前に動くと、巨肉で子宮口脇をぐちりと突き上げられ、直腸では丸肛門を裏返されながら腐肉を排泄させられる。お尻が後退すると、膣管の蜜汚れをGスポットに至るまで掃除されながら茸状の肉傘を引き出され、肛門では腐肉を根本までぐじゅると挿入される。

前後動する腰が淫らな8の字まで描き出すと、楓はまたも絶頂から降りられなくなった。

官能で戦慄く腰の振り乱しが際限なく加速して、サンバでも踊るがごとく常識外れの速さになってしまう。赤いスカートが水平に捲れた下で、様々な腰文字を描く柔尻が残像で霞み、蜜と腸液が散り撒かれる。脳裏も子宮も焼け爛れ、楓は紅潮した美貌を振り乱した。

「いやああああ——ッ、私の腰止めて止めて止めてえっ、あそこもお尻も壊れるうッッ」

「おおう。こんな名器でこれほどの腰振りをされては、私の陰茎が千切れそうだわい」

「尻穴もすげえぜ。ピンクの肛門弁を餅みてえに伸ばして、俺様の肉に媚びてきやがる」
二人に嘲笑されると恥辱で子宮がさらに沸騰し、潮までジュジュッと噴き混ぜてしまう。

「私と女帝には、お嬢様の手と口で奉仕してもらいましょか。動け、娼婦の艶指つやゆび」
両手首を触られると、黒い革手袋に包まれた両手も勝手に動き出して美乳が跳ねた。

右手が犀司の巨根を握り締め、左手が女帝の疑似男根を掴む。しなやかな両指が、尿道から肉傘下まで愛おしげに撫で擦り、肉芯まで染み入るほど念入りに二本の肉塊をしごき立てていく。主の男根に初めて触れて奉仕している感慨で、おぞましさをすら薄れて胸が一杯になる。犀司の臭い汁で手袋がどろどろになるたびに、絶頂で痺れた頭が甘くとろける。「どうしました楓様。そんな物欲しげな顔をして。口でも奉仕したくなったのですかな」
カッと湧いた屈辱で、楓の理性が戻ってきた。涎をどろりと垂らしながらも仇を呪む。

「だ、誰がお前のお：は：はあんっ：汚い物なんかっ：あひい：舐めたいと思うかあッ」
「痩せ我慢などせず、十年ぶりの主人の味を御堪能くださいな。動け、精液狂いの口」
よ喉に触れられると犀司の亀頭を、アルミニにすらしていない喉奥までぐぼりと丸呑みしてしまった。唇と頬を窄めて吸い付きながら美貌を前後させて、ぶちゆるるぐちゆるると抽送を始めてしまう。極限のおぞましさを噎せ返り、振り乱した肉轡から唾液がブジュブジュと噴く。だが舌を蠢かすごとに主人の味わいが弾け、子宮も脳裏も陶酔してしまう。

「ほら、犀司様の肉ばかり美味しそうに頬張つてないで、私の肉も味わいなさいよ！」
結んだ髪房を女帝に引かれて愛しい陰茎を吐き出させられ、新たな肉塊を喉奥まで詰め

られる。犀司にも反対側の髪房を握られ、交互に同時にと口奉仕を強制される。美貌を涎と男汁まみれにされて散々に堪能させられた後、二穴でしごき続けている陰茎が蠢動した。「そろそろイクぜえ。とろつとろの尻穴へ、俺様の特濃精液をたっぷり浣腸してやるぜえ」

「私も限界だ。このコリコリと亀頭へ媚び続けている子宮口を、どろどろにしてやるぞ」どぶりどぶりと二穴の最奥に射精されると、楓の全てが絶頂すら越えて白濁した。

淫らに変質させられた子宮口と結腸口が押し下がって開いてしまい、なんと子宮とS字結腸にまで亀頭を丸呑みしてしまう。第二の肉弁となった子宮口と結腸口が肉傘下を締め付け、二本の肉塊を腹奥に引きこみながら残り汁をぎゅるぎゅると搾り出してしまった。

魂まで朦朧となった楓は、背筋を反らせてとろけ顔を上向けたまま、硬直してしまった。「ああん、そんな可愛らしい顔をされたら私もたまらないわ。ほらほら飲みなさいッ」

ぶゆるりと女帝に喉奥へ射精されると、圧倒的な雄臭さで我に返った。噎せて肉塊を吐き出すが、すぐに犀司に髪房を引かれて仇の肉塊で口栓をされる。どぶゆりと主人の子種を追加されるともうたまらず、犀司の腰を抱き締めて陰茎を根本まで丸呑みしてしまう。

陰毛に唇を埋めたまま上目遣いで仇を見ると、恥辱の涙がぼたぼたと落ちてしまった。

「どうかお許しください、ご主人様」とでもいえば、今夜はこれで許してあげますよ？」

主の子種をしゃぶらされた楓は、もはや魂までぼろぼろになっていた。もう屈服しようとして挫けそうになった瞬間——両親たちの最後が蘇った。怨念が再燃して、肉塊を吐き出す

「誰がいうものかっ。どれだけ辱められても、お前だけには死んでも許しを請うものかっ」



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>